クラン・コラ Cran Coille:ケルト・北欧音楽の森

Editor: hatao ケルトの笛屋さん発行 October 2019 Issue No.303 http://www.celtnofue.com/

クラン・コラは月に2回、ケルト音楽、北欧音楽に関する話題をお届けする 国内でたったひとつのメールマガジンです。10日はライブ情報号として全国の ライブスケジュールを配信、20日は読みもの号として各ライターからの寄稿文 をお届けします。

この音楽にご興味のある方ならどなたでも寄稿できますので、お気軽にお問い合わせください。

CONTENTS

(1)現地レポート 新興市場中国のティン・ホイッスル事情

hatao

(2)アイリッシュミュージックのギター2

field 洲崎一彦

(3)私とケルト音楽

第四回:ロックギタリスト/音楽プロデューサー 平井光一さん 後編

天野朋美

(4)Colleen Raney——アメリカで伝統をうたう試み・その22

大島 豊

(5)編集後記 hatao

■ (1)新興市場中国のティンホイッスル事情

hatao

13億人の人口を抱え、経済発展により急速に豊かになった中国。衣食住という物質面が満たされると、人々は余暇や精神面の充実のために、スポーツや芸術といった文化活動にさらに時間やお金を費やすようになった。

私は、中国に興味を持って毎年のように通うようになって10年以上になる。

最初は日本との違いに戸惑うことばかりだったが、今では中国語がある程度 理解できるようになり、音楽を通じて現地の友人がたくさんでき、中国人 から生の声を聞くようになった。

そんな中国のアイリッシュ音楽事情については以前にクラン・コラで書いた記事があるので、興味のある方はこちらをお読みください。

https://celtnofue.com/column/trad/asian_celt/column_detail---id-1318.html

今回は中国の楽器事情、とりわけティン・ホイッスルについて取り上げる ことにする。

ティン・ホイッスル ー中国では哨笛シャオディー、台湾では錫口笛シーコウディーと呼ばれている一は、アイルランド音楽の楽器の中では唯一中国で人気が高まっている楽器だ。

中国音楽の笛の音色といえば、竹製の横笛、笛子ディイズがあるが、特に 中国北方では丈が短く音程の高い笛が好まれる。笛は音程が高ければ耳を 突き刺すような高音が遠くまで良く響くのだが、笛子はさらに竹紙の共鳴膜を 貼るため、カズーのような「バズ」を発生させ、音量が増大し、さらに強烈な 音色となる。

中国の笛は数多く種類があるが、私にとって中国の笛の音色といえば、この 笛子がまっさきに思い浮かぶ。京劇を見ても、中国人、なかでもとりわけ漢族 は高音の華やかな音色が大好きなのではないか。高音のティン・ホイッスルは そんな中国人の好みに良く合うのではないかと推測している。

その証拠に、中国人のアイルランド音楽セッションでは圧倒的にティン・ホイッスル奏者が多いし、中国人のSNS、微信(ウィーチャット)にはいくつものティン・ホイッスルのチャットグループがある(他の楽器のグループは無いようだ)。その人気の元になったのは、アメリカのティン・ホイッスル奏者Joanie Maddenジョーニー・マッデンの世界的なヒットCD作品"Song of the Irish whistle"シリーズの影響がある。中国のCDはショップではこのCDを含めアイルランド音楽のCDを入手することは難しいが、愛好家の間では違法な音源シェアが盛んで、今でもティン・ホイッスルの代表的なアルバムとして、ジョーニーは大?ダーマーと呼ばれて、大変な人気がある。

人気の背景として、このアルバムがヒーリング・ミュージックをコンセプトに 制作されたため、中国人が好む雄大でロマンティックな雰囲気の曲が多いことが あると考えられる。

今でこそ、訪中外国人の影響で北京では本格的なセッションを楽しめるようになったが、これまで10年ほどは、セッションといえばジョーニーのアルバム収録曲をそれぞれが練習して披露するというふうだった。ジョーニー自身も、

自分のCDが中国でこのように影響を与えたとは想定していなかっただろう。

ご存知かもしれないが、中国ではアメリカ発の数多くのSNSやネットサービスへの接続が遮断され、利用できない。その中にはamazonやiTunesがありアイルランド音楽愛好家は情報が限られた楽器が手に入りにくい中で、音源や知識を共有しあいながら、独特のティン・ホイッスルの音楽文化を発展させてきた。

そこには。中国の音楽教育も大きく影響している。中国では五線譜を用いず、 移動ドによる数字譜を用いる。これは、一種のタブ譜のようなものと思っても らってもよい。クラシックを除いて、中国音楽の楽器は基本的にこの数字譜を 使って習う。そのため、ティン・ホイッスルを中国笛のように見立てて、数字譜 で中国の流行歌や民謡を吹く需要があるようだ。

アイルランド音楽愛好家もこれは同じで、セッションに数字譜を書き込んだ ノートを持ち込む人も多い。

このように、ティン・ホイッスルは中国人の音楽文化にその居場所を見つけた わけだが、それでは楽器はどのように手に入れるのだろう。輸入楽器の高い 税金や特殊なインターネット事情によって、中国ではいくつかのメーカーが 生まれた。

代表としてGale!)nというブランドでティン・ホイッスル、ロー・ホイッスル、ポリマー製キーなしアイリッシュ・フルートを製作する北京の徐航Andy Xuアンディ・シュー氏は、およそ10年前に楽器製作を始めた。本業は音響機器メーカーの会社員であるため楽器製作は副業なのだが、中国では淘宝網タオバオを通じて販売しており、中国の愛好家の間では入手のしやすさ、品質から定評がある。音響工学をもとに設計された楽器は鳴らしやすく音程も整っている。私のお店を通じて日本でも購入することができ、価格と品質のバランスが優れているため、人気がある。

これ以外のメーカーもいくつかあるのだが、品質的に成功しているとは言い難いため、紹介するのは省略する。良くない例としては、GoldieやSusato、Burkeといった有名メーカーのデザインによく似た製品がある。コピーだという表現は避けるが、その評価は楽器としての品質によって判断されるべきである。

中国の13億人の市場は巨大で、もし中国でティン・ホイッスルがメジャーな楽器になれば、ティン・ホイッスルの市場に莫大なインパクトを与えることになるだろう。中国は製造業の国で、人件費がまだ安いため、国際競争力も抜群である。中国では、そのような未来のティン・ホイッスルの市場を狙って、いくつものメーカーが楽器開発、市場独占のしのぎを削っている。(つづく)

前回は、ギターでアイリッシュチューンの伴奏をする場合は、普通に歌の伴奏をするような気持ちでやったらアカンよというようなお話しをしました。では、どうすればいいのか。メロディー陣には根性で立ち向かっていかなければならないのだ! と若いアイリッシュギターを志す若者達にエールを送ったわけですが、やはり、これでは済みませんでしたね。根性って何やねん?という話にどうしてもなってしまう。というわけで、出してしまった話題なのでもう少し続けることにします。

根性と言うのは前々回までわけのわからない事を延々と書いて来た、例の表現 意欲における根性のことです。ただ、ここに話を戻すとまたややこしい話になっ てしまうので、今回は、より具体的にギターのお話しを続けようと思います。

よく、アイリッシュチューンの伴奏をするギタリストに対して、メロディを 覚えていない曲は弾くな!という戒めを耳にします。確かに、アイリッシュ チューンにはよく似たコード進行の曲が無数にあるので、知らない曲でも慣れた ギタリストならある程度合わせて弾くことはできるわけです。では、何故、前述 のような戒めが語られるのでしょう?

それは、日夜必死の努力で曲を覚えているメロディ陣達のやっかみに違いない!そうですね。私がかつてブズーキで伴奏専門にやっていた時は、きっとそうに違いない、と、こんな風にひねくれた感想も抱いていました。あるいは、こういう要素もまったく無いとは言い切れない雰囲気も確かにあります。現に、知らない曲なのに抜群の伴奏をするギタリストもいないではありません。

ただ、いわゆる、根性で表現意欲を保ったままメロディ陣に負けない伴奏を しようと思った場合、実際にはどんな作業が必要になるかを考えた時には、 確かに、いかにコード進行をつかんでいても知らないメロディに伴奏をつける のはちょっと不利になりますね。

もしかしたら、これは、音楽ジャンルにかかわらずという事なのかもしれませんが、アイリッシュチューンのメロディには特に独特の推進力があります。なので、この推進力に伴奏が負けないためには、ギターを弾いている方もそのメロディを奏でているぐらいのつもりにならないと太刀打ちできなくなるわけです。

例えば、ギターを鳴らしているその音が、ズンチャカズンチャカ、というパターンだったとします。ここで、自分もメロディーを弾いているぐらいのつもりにならないと、つい、この自分が弾いている、ズンチャカズンチャカに

意識が引っ張られてしまうのですね。

文字で書いてしまうとよく判らない状態かもしれませんが、自分は確かに ギターで、ズンチャカズンチャカ、と弾いているのですが、頭の中ではメロ ディー陣の弾いているメロディーを奏でているつもり……。みたいな、そんな 感じになる必要があるわけです。

これを、知らないメロディーの曲に対してやるとすれば、確かに、とても不利な状況になってしまいます。知らないメロディーの曲であれば、つい、メロディー陣のメロディーを聴き過ぎてしまいますから、あるいは、知らないメロディーなのですからとても一緒にメロディーを奏でているというような気持ちになることは難しく、つい、自分の弾いているズンチャカズンチャカの方に気が取られてしまうことになります。こうなってしまうと、伴奏はどんどんメロディー陣とはずれて行きますね。

というわけで、メロディを覚えていない曲は弾くな!という戒めは、非常に 合理的なアドバイスだったわけです。

ここで、この、ギターのズンチャカズンチャカ、に意識が引っ張られても、 それは、メロディー陣が奏でているメロディーが乗っているリズムなのだから、 それで良いのではないか?と思った方もおられると思います。

多くの人が誤解している事があります。リズムは音ではありません。リズムは拍動であり極端に言うと時間です。だから、この、ギターのズンチャカズンチャカ、はリズムではありません。音として出ている以上、これは、ズンチャカズンチャカ、というメロディーなのです。複数音が出ているからハーモニーではないかという意見もあるかもしれませんが、それなら、あくまで、これは、複数のメロディーだと考えてください。

少し話はそれますが、時々こういう台詞を耳にします。いわく、自分はリズム 感が悪いのでバウロン(片面太鼓です)を練習しようと思う。これ、間違って ますよね。

バウロンは太鼓ですから俗にリズム楽器を呼ばれます。しかし、ドコドコドン!と音が出た瞬間にこれは、あくまで、メロディーなのです。つまり、バウロンを練習したらリズム感が良くなるということはありませんね。

つまり、この、ギターのズンチャカズンチャカ、に意識が引っ張られてしまうということは、メロディー陣が奏でるメロディーとはまた別のメロディーに意識が向いてしまうということになります。

同じ拍に乗っている複数のメロディーが存在する時には、その、ハーモニーに 破綻がなければ何も問題ないのではないか?と、これも、多くの方がこのように 考えられるのですが、ここが、アイリッシュチューンの面白い所で、アイリッ シュチューンは、たとえ、同じ拍動に乗っているメロディーであっても、曲の メロディーごとに微妙にリズムが変わります。拍が同じなのにリズムが変わる ってどういう事だ!!

まったく、その通りです。本当に、どういう事だ?!なのです。

アイリッシュチューンは、一見、シンプルなメロディーがシンプルな拍の上に乗っかっているシンプルな音楽です。一応、音楽としてはこれで充分に成立します。

一応、成立するというこは微妙は言い回しですが、この事実も重要です。 初めて楽器を始める初心者の方達にはこれが、敷居が低いという要素になって すごく始めやすい。これは、非常に強力な要素です。

が、その内に、あれ?という事が起こって来ます。なんかちょっと違うなあというあの感じです。同じ拍で同じメロディを弾いているのに何かがまったく違うぞ?という、例のあの感じにぶち当たる日がやってきます。

ここからが、皆さんそれぞれ、独自の工夫の上で試行錯誤を繰り返し、各々いるいるな持論を展開されて行くわけです。現在の所、恐らく、これに対する 正解というか万人が認める定説というものはまだ存在ないと思います。

なので、今、ここで書いているお話しも、あくまで、私のそういう持論の ひとつですので、ぜんぜん違う考え方で取り組んでいる方も数多くいらっしゃる と思います。

ギターのことに特化してお話しするつもりが、アイリッシュチューンの謎みたいな方向に進んでしまっては、またまた、取り留めの無いことになってしまいますね。話を、ギター伴奏に戻しましょう。

つまり、アイリッシュチューンのギター伴奏は、その曲のメロディーを覚えていて、メロディー陣と一緒になって自分もメロディーを奏でているつもりで演奏することが、とっても有利だということです。

こういう風に言うと、メロディー陣の奏でるメロディーを往々にして聴き過ぎてしまって、結果的に、それをなぞるようにメロディーを頭の中で追いかけるような感じになってしまう事がよくあるのですが、これでは、メロディー陣のメロディーにブレーキをかけているような状態になってしまいます。

なので、あくまで、メロディー陣と一緒に、同時に、頭の中でメロディーを奏でて行く必要があります。なおかつ、一方では、ギターをズンチャカズンチャカ、弾くわけです。このようにして、ようやく、あのメロディーの強力な推進力に弾き飛ばされる危険性を回避することができます。この方法以外で、

メロディー陣のあの推進力に負けない確実な方法は私はちょっと思い着きません。

文章でこのような事を書いていくと、ああ、確かに、そんなややこしい作業を するとすれば、集中力がいりますねえ。根性がいりますねえ。と、納得していた だければ良いのですが……。

これは、あくまで、私のような凡人の考えです。突出した音楽的センスを持ち合わせている人には、こんな作業は、ほとんど無意識につるつるっとやれてしまう事なのだと思います。(す)

■ (3)私とケルト音楽

■ 第四回:ロックギタリスト/音楽プロデューサー 平井光一さん 後編

▼ 天野朋美 ■-

様々な分野で活躍している方をゲストにお招きし、ケルトにまつわるお話を伺う 「私とケルト音楽」。

第四回のゲストはロックバンドPANTA&HALのギタリストであり、レベッカや Raphaelの音楽プロデューサーとして日本におけるメジャー音楽界の中心で活躍 された平井光一(ひらいこういち) さんです。前回に引き続き、ロックミュージックを軸に「メジャー音楽の中のケルト」をテーマに語っていただきました。 どうぞお楽しみください。

○日本のメジャー音楽とケルト

――日本のメジャー音楽におけるケルトについて教えてください。

平井: ここ十数年の日本のポップスの中では、作為的にスパイスとして使っていることが多いと感じています。特に松任谷由実や葉加瀬太郎、槇原敬之は日本のポップスの中でのケルトを広めるのに一躍買ったと思います。大ヒットしたSMAPの「世界に一つだけの花」なんかは特に、メロディーもアレンジもケルトの要素がありますね。

――それ以前にもケルトを感じる音楽はありましたか?

平井:前はあまり聞かなかったですね。マニアックなものが好きだという事を、その当時は言わない風潮もあったんじゃないかな。日本のポップスは、ベース部分に様々な音楽ジャンルの影響を受けています。日本人は原型を極めて演奏するというよりも、要素を取り入れるのが上手です。今まで日本のポップスではジャズ、サンバ、シャンソンなど様々な音楽ジャンルを取り入れたものがヒット

してきました。80年代から音楽制作側の人間がジャズからロックミュージシャンに変わっていき、その中には僕と同じように供の頃にレッドツェッペリンなどロックミュージックの中のケルトの洗礼を受けた人が多く、実際にケルトが使われるようになってきています。

ヒットする要素には、音楽だけでなくヴィジュアルも重要です。

ジャズ歌謡はスーツ、ロックはジーンズ、レゲエはドレッド、R&Bはアフロなど。ケルトは長い髪のミステリアスな女性に屈強な肉体の男性でしょうか。もしくはチェックのシャツにキャスケットなど、派手に着飾らない雰囲気ですかね。

歌詞も重要です。昔はのんびりと愛について歌っていましたが、それだけでは ヒットしません。ケルト音楽の中ではあからさまに戦争反対など言わないが、 間接的に世界平和を歌っている曲も多いですね。政治的なメッセージや神話、 宗教的なものが含まれた歌詞はとても魅力的でしょう。

世界に一つだけの花からはアレンジや歌詞からもケルトを感じることができると考えています。「ナンバーワンよりオンリーワン」は宗教的な考え方を感じますね。

音楽と宗教は切り離すことができません。日本は無信教の国で、お葬式、お正月、クリスマス、ハロウィン、なんでもやっちゃう国です。取り入れるのは上辺だけで、決して欧米の文化通りではなく、クリスマスはケーキを食べて、バレンタイにはチョコを送る。それは悪い事ではなく、良い所を浅く広く取り入れるやり方が日本は本当に上手です。

○日本人がケルト音楽を求める日が必ずやってくる

――平井さんは以前から「日本でケルト音楽が流行する日が必ず来る」という考えをお持ちですが、その理由を教えてください。

平井: インタビュアーの天野朋美さんとは10年以上ケルトの要素を取り入れた音楽を一緒に制作していますが、僕は以前から日本の人々がケルト音楽を求める日が来るんじゃないかと考えていました。ケルトの旋律はわかりやすく、優しさを感じることが出来ます。当たり前のようですが優しさは皆が求めるところです。

音楽は不安定なものが安定したくなるケーデンスで出来ています。人間は無意識にケーデンスを求めているのです。不安定なコードの次は落ち着きたいと感じ、安定すると癒しがある。ケルト音楽ではコード進行に加えて、声、楽器の音から癒しを得られるのです。

また、ケルトの魅力は「女神、英雄、妖精」にあると思います。人々が夢中に

なりやすい、わかりやすい要素がそろっています。ゲームや映画、ミュージックセラピーなどにぴったりの音楽です。「勇ましさ」もケルトの魅力の重要な部分で、ある映画ではイギリス軍の戦争場面でおじいさんのバグパイプ吹きが登場します。機関銃の球がどんどん飛んで来て倒れてしまうのですが、その後も、彼の後ろにいた兵士が楽器を拾って吹きながら行進していくのです。殺しても殺しても聞こえてくるバグパイプには、死を恐れない兵士への恐怖を感じたことでしょう。

そんなケルト音楽は次なる日本の音楽として、日本人にぴったりはまるのでは と考えています。他の音楽や文化ではケルトの世界観のように美しく、多種多様 なファンタジー要素が出てくるものは無いと思います。ヒットする要素が多く含 まれているので、今後さらに人々に大きな影響を与えていくでしょう。

――どうしたらもっと日本でケルトが盛り上がるでしょうか?

平井: 映画やテレビを巻き込んで広めていくなど、大きな動きが欲しいですね。ケルト音楽は盛り上がりつつありますが、音楽業界の力は弱くなっています。「ケルティックウーマン」が売れたのは、ポップスの形にしたからで、「ブラックモアズナイト」がいまいち出てこないのは、マニアック路線だからですね。日本語の歌詞をつけて歌われた「庭の千草」はポップスとして考えてもかっこいい。伝統音楽をわかりやすい形で演奏するというのがヒットの秘訣のひとつでしょうか。

○安いものばかり求める世の中に警告を

――音楽業界の力が弱くなっているのですか?

平井:根本的な所ですが、音楽を作るにはお金がかかります。

今はEDMが全盛ですね。僕の予想では、EDMブームがもう少し早く終わり、人間が弾いた本物の音を求める世の中になると思っていました。元々はニュー

ヨークのアンダーグランドの人々が始めたもので、それがだんだんメインの音楽 になってきました。日本では小室哲哉君が始めて、国内でも主流になりました。

僕自身も80年代からコンピュータミュージックをやっていますが、とても簡単に音楽を作ることが出来ます。ペーストするだけで音楽を作れるので、手を痛めながら楽器の練習をすることが少なくなりました。そういう点ではとても有益ですね。

しかしながら、それでも多くの人が人間が弾いた音楽を求めています。ところが「物が安ければ安いほどいい」と考えられる今の世の中では、音楽制作にかけられる費用も限られ、そういった作品を作るのは難しくなっています。音楽はただ同然で聞くのが当たり前になりつつありますが、聴き手、作り手共に「良いも

のにはお金をかける」という考え方があるといいですね。

○大切なのは自分の信じたものを続けること

――ケルト音楽の盛り上がりを望む一方で、形を変えず現状のままでいてほしいという考え方の人も多くいるようですね。

平井:どんなに素晴らしいものも飽きられてしまう。ヒットしなければ廃れることもないという考え方も一理あります。伝統を守ってほしいという考え方ももちるんあり、そういう人もいて当然です。いい意味で原理主義者とも言えますね。真言密教、山伏、など変わらずに伝統を守る人は多くいます。本来の意味の保守派。ジャズ、ブルースにおいてもその傾向が強いです。

どちらかと言えば僕自身もギターはハードケースで持ち運ぶことを信念にしているなど保守派寄りですが、ビートルズやレッドツェッペリンを見ていると4年程で音楽は変化しています。全くジャンルを壊してしまうのではなく、スピリッツはそのままで枠組みの中で形を変えて向上していくのは素晴らしい事であると感じます。形を変えるにしろ原型を守っていくにしろ、大切なことは妥協しない事だと思います。それは正面から真面目に取り組み、楽をしないという事です。特にプロミュージシャンを目指す人にとっては、自分が音楽やっていく上で楽をしたいのであれば、音楽はやめた方がいいでしょう。音楽でお金を稼ぐという事は本当に大変な事です。

――最後に読者メッセージをお願いします。

平井: 僕が伝えたいことは、「自分の信じたものを続ける」という事ですね。 中でも保守派でいると、古臭い等といろいろ言われることもあるでしょう。人々 は新しいものを求め、いずれ飽きてします。どんな素晴らしいものでも飽きられ るとしたら、ひとつの物を信じ続ければいいと思います。僕がロックを始めた頃 はロック自体が世の中から認められず、音楽じゃないとまで言われていました。 そんな中でロックを続けることができたのは、ジャズやクラシックに引けをとら ない素晴らしいものと信じ続けていたからです。

ケルト音楽に巡り合った皆さんも、自分の感覚を信じて貫き続けてください。

(おわり)

ロックギタリストであり音楽プロデューサーとして活躍する平井光一さんをゲストにお迎えした第四回「私とケルト音楽」。いかがでしたか?ご感想やインタビューリクエストなどいただけたら幸いです。次回もどうぞお楽しみに。

[Profile]

ゲスト:平井光一(ひらいこういち) レベッカやRaphaelのプロデュースを手掛ける。PANTA&HAL、中村雅俊、 岩崎良美、田中裕子等にギタリストとして参加。 http://studio25.jp/index.html

インタビュアー: 天野朋美(あまのともみ) ケルトを愛するシンガーソングライター、ティンホイッスル奏者。 令和元年やまなし大使就任。 https://twitter.com/tomu_1234

		(4)Colleen	Raney——	-アメ	リカー	で伝統を	うた	う試み・	・その2
--	--	------------	---------	-----	-----	------	----	------	------

★島 豊 ■------

Colleen Raney——アメリカで伝統をうたう試み・その23

アメリカのケルト系シンガー、コリーン・レイニィの録音を聴くシリーズ。 4枚めのアルバム《Here This Is Home》の第10回。最後のトラック〈Craigie Hill〉を聴く。

10. Rose Loughlin, The Chicago Sessions, 2008, 5:56, Seattle, Tidal

セミアコ・ギターとベース。わずかにブルージー。アメリカンのうたではある。アルバム全体として悪くない。なかなかに引き締まった良い録音。アレンジにも工夫がこらされ、前衛的なサウンドも使う。背伸びせず、自分の分に合ったところできっちり唄う。やはりブリテン、アイルランドに強く影響されたアメリカン・シンガーになるが、Connie Dover の行き方ともコリーンのスタイルとも異なる。素材の一つと割り切っているわけでもない。自分の歌として唄ってはいるが、伝承へのリスペクトも感じる。一方で伝承からは一歩距離をおく。たとえばジャズやポップスのシンガーがスタンダードを唄うことで、自分のスタイルを浮き立たせるのとも違う。唄っている曲はどれもスタンダードと呼ばれていい。ジャズのスタンダードと異なるのは、歌それぞれに伝承があり、歴史があり、慣性を備えて、安易な解釈をはねかえす。

歌として自立している。それを唄うことは、シンガーが歌により添うことだ。ここでは歌にぴったり寄りそうのではなく、半歩引いて、自分の生きている文脈にあらためて置いている。そこで立ちあがってくるものを?む。コリーンはもう少し伝統に寄りそう。伝統の最新のヴァージョンを担おうとする。この人は伝統を継ごうとはしていない。全く無視もしていない。伝統も歌の一部として把握する。ジャズのスタンダードは歌そのものの経歴は無視されるか、少なくとも脇に置かれる。

プロデュースはデニス・カヒルで、いい仕事をしている。

11. Caladh Nua, Happy Days, 2009, 3:43, Ireland, Tidal 女性ヴォーカル、ギター、ブズーキ、マンドリン。ギターがストロークとベース、ブズーキはアレック・フィン型の裏メロ。マンドリンがリード。フィドルとアコーディオンが間奏。フィドルがハーモニー。メロディはなぞらず、かなり変奏する。闊達なミドル・テンポ。一見、あまり力のないバンドが軽快なテンポでやっつける典型のように聞える。その実、いずれも実力のあるメンバーからなるアンサンブルが楽しみながらもきっちりとアレンジしている。シンガーはやや低めの声域、無理のない唄い方で、テンポに流されずに丁寧に唄う。

カーロゥ、ウォーターフォド、ケリィ、キルケニィという、南部出身の 5人組。伝統音楽の薄いウォーターフォドの出身者が入っているのは珍しい。 こういう地域にも伝統音楽があらためて浸透しているということか。バンド名は New Grange の意味。

Brian Mooney (Banjo and Bouzouki, Whistles)
Lisa Butler (Lead Vocals, Fiddle)
Paddy Tutty (Fiddle, Viola, Bodhran)
Derek Morrissey (Button Accordion)
Caoimh!)n!) Fearghail (Guitar, Flute, Vocals)
https://www.facebook.com/caladhnuamusic/

12. The Dardanelles, 2009, 5:33

カナダはニューファンドランド出身の5人組。カナダのケルト系ルーツ・ミュージックの最前線を引張るバンドの一つ。

http://thedardanelles.com/

やや遅めのテンポ。女性シンガーが正面から唄いだす。声域はメゾソプラノあたり。伝統に忠実に、とことん感傷を排した歌唱。伴奏はどちらもピッキングによる裏メロ。左のブズーキだけで始め、右にギターが入り、間奏からホィッスルとアコーディオンが加わる。これも力演。

13. The Old Dance School, Chasing The Light, 2011, 4:09, Tidal

Steer In The Night: Live, 2014, 5:53

ROBIN BEATTY: Guitar, Vocals
HELEN LANCASTER: Violin, Viola
SAMANTHA NORMAN: Violin

JIM MOLYNEUX: Drums, Accordion, Vocals

AARON DIAZ: Trumpet, Electronics LAURA CARTER: Woodwind, Vocals

ADAM JARVIS: Double Bass

イングランドはバーミンガムをベースにする7人組バンド。2006年に Birmingham Conservatoire の学生たちによって結成された。メンバーは ジャズ、クラシック、古楽、ワールド・ミュージック、フォークの分野で活動し ている。リーダーのロビン・ビアティのギター・ヒーローはビル・フリーゼルと イアン・カーだそうだ。これは21世紀の世代だ。

http://theolddanceschool.com

2015年に The Fair Rain と改称。今は活動停止中の模様。とはいえ、その録音は追いかける価値がある。

http://www.thefairrain.com/

男性ヴォーカルは肩の力の抜けた、しかし感情を強調しない歌唱。メロディはかなり崩すが、本来備わった美しさは壊さない。ライヴではテンポを落とし、トランペットのソロをフィーチュアする。ジャズではあるが、フォークのセンシティヴィティを備えたジャズというべきか。フィドルとヴィオラをドローン的に配するのは、ジャズの枠組みから外れようとする指向。

14. Hanz Araki & Kathryn Claire, The Emmigrant Song/ The Laborers Lament, 2012, 4:13, Tidal

先日、大渕愛子さんの肝煎で来日ツアーをしたオレゴン州ポートランドをベースとするシンガー・ソング・ライター、キャスリン・クレアがハンツ・アラキと作っている一連のアルバムの1枚。

ここではサイド・ドラムのブラシ主体のパーカッションの細かくステディなビート、極端に音数の少ないエレクトリック・ギター。フィドルとフルートのドローン的ハーモニー、アコースティック・ギターのピッキングが織りなすミニマルなタペストリーを背景にして唄う。発音、発声はアメリカンだが、やはり感情を込めない。ヴァン・モリソンがよくやるように、連の最後のフレーズを繰り返すのが、感情を込める一つの手法だろう。2番からハンツがハーモニーを合わせる。先日のライヴでは自作のせいか、歌の感情を表に出していたが、伝統歌を唄うときにはスタイルを変えている。

どちらかといえばむしろ明るく、カラっとして、突き放したアプローチが、歌 の底に流れる悲哀を伝えてくる。

キャスリンにはもう一つ、録音がある。

17. The Lasses & Kathryn Claire, Live At De Parel van Zuilen, 2017, 4:32 https://thelasses.bandcamp.com/album/live-at-de-parel-van-zuilen

キャスリンは2013年にある歌のセッションでアムステルダムをベースとするデュオ The Lasses = Margot Merah & Sophie Janna に会う。これはそのトリオによるユトレヒトでのライヴ。シンプルなギター・ピッキングのリフという最低限のバックで、キャスリンのリードによるハーモニー・コーラスでの歌唱。腰を落とし、じっくりと唄い、ここぞというハーモニーを強調する。キャスリンはやはりアメリカンの発音、発声だが、ここでも感情は排する。メロディはハーモニーが美しく響くようにアレンジしなおしているようだ。キャスリンによるゆったりしたフィドルの間奏も味わい深い。

今回はここで時間切れ。以下、次号。次号でなんとかこのアルバムを終らせたい。(ゆ)

-----(5)編集後記-

今回も配信が遅れまして申し訳ありません。なお、ライブ号は掲載依頼がなかったので、発行を見送りました。

現在、ノルウェー北部のトロムソから発行しています。こちらはもうすぐ極夜に向かっており、11時くらいに日が登ったと思えば午後3時には沈んでしまいます。極夜というと漆黒の闇が毎日続くのだろうかと思いましたが、雪に照らされた空はほんのり明るく、とても綺麗です。

明日からブルターニュに行ってきます。

当メルマガ及び「ケルトの笛屋さん」のコラム・コーナーでは、ライターを随時募集しています。ケルト音楽に関係することで、他のメディアでは読めないもの、読者が興味を持ちそうな話題を執筆ください。頻度については、一度にまとめてお送りくださっても構いませんし、 毎月の連載形式でも結構です。 ご応募に際しては、

- ・CDレビュー
- ・日本人演奏家の紹介
- ・音楽家や職人へのインタビュー
- ・音楽旅行記

などの話題で1000文字程度までで一本記事をお書きください。ご相談の上で、「ケルトの笛屋さん」に掲載させていただく場合は、1文字あたり0.5円で買い取りいたします。ご応募は info@celtnofue.com までどうぞ。

★ライブスケジュールは以下のページでカレンダー形式で掲載していますので ご利用下さい。 https://celtnofue.com/community/event/ ★全国のセッション情報はこちら https://celtnofue.com/play/session_info.html ★全国の音楽教室情報はこちら https://celtnofue.com/play/lesson_wide.html クラン・コラ:アイルランド音楽の森(月2回刊) 発行元:ケルトの笛屋さん Editor:hatao *掲載された内容を許可無く転載することはご遠慮ください。 *著作権はそれぞれの記事の執筆者が有します。 *ご意見・ご質問・ご投稿は info@celtnofue.com へどうぞ。 *ウェブ・サイトは http://www.celtnofue.com/ *登録・解除手続きはこちらからどうぞ。 まぐまぐ! http://www.mag2.com/m/0000063978.htm Melma! http://melma.com/backnumber 98839/ *バックナンバーは最新号のみ、下記URLで閲覧できます。それ以前の号をご 希望の方は編集部までご連絡下さい。 まぐまぐ http://www.mag2.com/m/000063978.htm

Melma! http://www.melma.com/backnumber 98839/

【メルマ!からのお知らせ】サービス終了のお知らせ

メルマ!は2020年1月でサービス終了を予定しております。

詳しくは以下のURLをご確認ください。

http://rd.melma.com/ad?d=P0A0vRMMP0I1x6Ung0LGeGxS61ba242a7c93d2ce

···─···─ ↑ メルマ!PR ↑─···

■今回の記事はいかがでしたか?

下記ページより、あなたが記事の評価を行う事ができます! http://melma.com/score_b0U1H6Inb0rGeGiSA11am4ma34533d83/

□このメルマガのバックナンバーやメルマガ解除はこちら
http://melma.com/backnumber_98839/
□その他のメルマガ解除や登録メルマガの検索はこちら
http://melma.com/contents/taikai/